静岡県景観賞30周年記念誌

未来へおくる物語

景観を守り、育て、創る人たちの想いを大切に大切に、
未来へ届けたいと思います。

美しいしずおか景観推進協議会

<発行>
美しいしずおか景観推進協議会

ー正会員ー
静岡県
一般社団法人静岡県建築士事務所協会
公益社団法人静岡県建築士会
一般社団法人日本造園建設業協会静岡県支部
一般社団法人静岡県建設業協会
一般財団法人静岡県建築住宅まちづくりセンター

ー協力会員ー
公益社団法人静岡県造園緑化協会
公益社団法人静岡県山林協会
公益社団法人静岡県屋外広告協会
静岡県土地改良事業団体連合会
静岡県道路利用者会議
静岡県土地区画整理組合連合会
静岡県河川協会

<事務局>
静岡県交通基盤部都市局景観まちづくり課
静岡県静岡市葵区追手町9番6号　TEL 054-221-3490

<編集>
株式会社ディスタンス・インターナショナル
静岡県静岡市葵区通車町7-6　TEL 054-271-1015

100年後の誰かも、感動させたい。

たとえば、
風景が一枚の絵画だとするならば、
景観は一篇の小説である。
そこにはいつも、人がいる。
当たり前を打ち破ろうとする人。
受け継いだものを繋ごうとする人。
無くした誇りを取り戻そうとする人。
新しい価値を創り出そうとする人。
未来を想って動こうとする人。
わたしたちが美しい景観に
心動かされてしまうのは、
目に映る風景の中に彼らの物語を
感じているからではないだろうか。
その物語が続くかぎり、
美しい景観は積み重なっていく。
50年後も、100年後も、きっと。

FUJIYAMA DAYS. http://shikinofuji.com/

景観賞30周年記念に寄せて

景観賞が創設されて30年。継続は力です。これまでの歩みに敬意を表し、記念誌の刊行を心からお祝い申し上げます。

川端康成は『伊豆序説』で、伊豆半島を「海と山の風景の画廊二つの大きな公園」と讃えました。その形容はそのまま「ふじのくに静岡県」に当てはまります。変化に富んだ本県は季節ごとに味わいがあり「山川草木国土悉皆芸術（せんせんそうもくこくどしっかいげいじゅつ）」といえる美しい地域です。

富士山が世界遺産になって以来、南アルプス、駿河湾等々、本県の地域資源の世界クラス認定件数がハイペースで増えています。静岡県全体の立ち姿は、いわば公共の庭園と言ってよく、今年3月に「ふじのくに回遊式庭園」構想を掲げ、県内各地の魅力的景観を巡って楽しむ取り組みをスタートさせました。

記念誌には、受賞地区が美しい写真で紹介されています。それらの一つ一つが、日々の生活文化と最高級の借景からなります。竹が節目をもって伸びていくように、30周年を機にさらに高みを目指して、世界トップクラスの良好な景観形成への努力の継続を期待します。ふじのくに静岡県が日本中、いや世界中から憧れられるガーデン・アイランドとして花開くことを確信しています。

平成29年11月
静岡県知事　川勝平太

静岡県景観賞、これまでも、これからも

美しいしずおか景観推進協議会では、美しい景観を守り、育て、創るため、昭和63年度に静岡県景観賞を創設し、この度30周年を迎えました。これまで景観づくりに携わってこられた皆様や賞の実施に御協力いただきました皆様に、深く敬意を表しますとともに、心から感謝申し上げます。

近年、我が国は、観光立国の実現とともに、東京一極集中を是正し、地方の人口減少に歯止めをかけ、国全体の活力を上げる地方創生の実現に向けて、鋭意努めているところであります。

本県におきましても、東京２０２０オリンピック・パラリンピック自転車競技やラグビーワールドカップ２０１９などの国家的イベント開催を契機に、おもてなしの心による交流の拡大、住民が誇りと愛着を持ち心豊かに暮らせる景観形成に取り組んでおります。

この記念誌で紹介致しました受賞地区をはじめ、各受賞地区が率先して景観づくりを実践されてきたことに、改めて深く敬意を表しますとともに、これからも、受賞に相応しい地区が、各地に誕生することを大いに期待しております。

今後も、協議会会員一同、県民の皆様とともに、美しいしずおかの景観形成に取り組んでまいりたいと考えておりますので、御支援、御協力をお願いいたします。

平成29年11月
美しいしずおか景観推進協議会会長
静岡県交通基盤部長
鈴木克英

美しい景観遺産を創り続けよう

静岡県人で在りながら、こんなに素晴らしいところが県内そこかしこに点在していることを、現地審査を通じて知りました。事実、30年間の景観賞受賞地区は、静岡県らしい文化・歴史資源を活かし、周辺環境に配慮して新たに良好な景観を創り、地域住民が保全・維持などのまちづくり活動で育ててきた素晴らしい結果であります。

実際、美しい景観地区は、そこで暮らす住人には当たり前で、ことさら意識することもない自然の姿であり、来訪者の称賛のことばで、地域の良さを再認識させられるような地区だと思います。

ところで、素晴らしい景観形成には、地域固有の景観を活かした創造性、様々な組織や人々による協働性、地域社会に文化資産として残す継承性の三視点が重要であると考えます。

今後、景観賞受賞地区が美しい地域景観を形成する核となり、それぞれの周辺環境まで好影響を及ぼし、日々の生活環境が、意識せずとも豊さと潤いに満ちた空間となれれば最高であります。

それは、不可能ではありません。

我々が更に続けて70年間、この景観賞を継続するに値する努力をすれば、全国いや世界から注目される「美の国・静岡県」になれるのではないでしょうか。

平成29年11月
静岡県景観賞審査委員長
静岡文化芸術大学名誉教授
川口宗敏

静岡県景観賞・静岡県都市景観　最優秀賞受賞地区

2000年 掛川市
森に抱かれた
ねむの木村の施設群

1997年 伊豆市
竹林の小径と修善寺回廊

1994年 下田市
ペリーロード

1991年 藤枝市
玉露の里

1988年 浜松市
サンクンガーデン

2001年 藤枝市
大旅籠柏屋と
歴史にぎわい空間

1998年 三島市
パン屋の街かど

1995年 静岡市
由比本陣公園と街並み

1992年 静岡市
静岡市七間町通り

1989年 静岡市
静岡市庁舎本館

2002年 伊東市
温泉文化香る東海館界隈

1999年 浜松市
天神蔵

1996年 沼津市
沼津御用邸記念公園と
その周辺地区

1993年 富士市
富士市文化会館
「ロゼシアター」とその周辺

1990年 静岡市
市立城内中学校

2015年 静岡市
静岡県草薙総合運動場体育館
「このはなアリーナ」

2012年 静岡市
新東名とみかんの里
「原・新丹谷（はら・あらたにや）」

2009年 御殿場市
森の中の環境共生型まちづくり
「矢崎総業Y-TOWN御殿場」

2006年 三島市
三島市中郷温水池

2003年 湖西市
旧新居宿の紀伊国屋と
街並み修景

2016年 磐田市
豊岡中央交流センター

2013年 静岡市
世界遺産富士山を望む
風景美術館「日本平ホテル」

2010年 掛川市～湖西市
天浜線のある風景
（文化資源を際立たせる自然・産業景観）

2007年 川根本町
地域住民と守る郷愁の風景
「大井川鐵道田野口駅」

2004年 袋井市
多島美 月見の里

2017年 三島市
ガーデンシティみしまの
シンボルロード
「花飾り」と「袖看板」

2014年 三島市
大社の杜 みしま

2011年 三島市
三島市景観重要樹木
「文教町イチョウ並木」

2008年 静岡市
わさびとお茶の里
「有東木」

2005年 浜松市
にぎわいとやすらぎの空間
「アクト通り」

静岡県景観賞受賞地区の今を訪ねて

The 30th Anniversary

静岡県都市景観賞が創設されたのは昭和63年。以来、30年間にわたって美しい景観やそれを支える多くの活動を讃え、表彰してまいりました。

美しい景観に触れるとき、そこには地域の文化や営みを守り継承しようとする人々の情熱や活動があります。過去の受賞地区はどのように時を重ね、景観形成に関わった皆様が今何を想っているのか、この機会にあらためて訪ねてみることにしました。

今回訪問させていただいた五つの受賞地区にもやはり、並々ならぬ愛情と、そこに生きる人々を思いやるあたたかな心がありました。

景観には、人をつなぎ、人を集める力があります。静岡県景観賞の歴史を振り返るとともに、未来に向けた景観形成のあるべき姿を見つめていきたいと思います。

記載している受賞者の方の部署や肩書は平成29年1月現在のものです。

第6回静岡県景観賞 優秀賞（美しいしずおか景観推進協議会賞）

The 30th Anniversary

遠州横須賀のまちづくり（掛川市）

東名掛川ICから車で20分。
毎年4月の第1週に開催される「遠州横須賀三熊野神社大祭」、10月の第4週に開催される「遠州横須賀街道ちっちゃな文化展」は、いずれも地元の人たちによって運営され、大勢の観光客を集めている。

平成11年から始まった「ちっちゃな文化展」

良好な人間関係がつくったまちなみ

城下町らしさが香るまちなみの中心に、味のある人物がいた。掛川市横須賀地区でまちづくり活動を行っている遠州横須賀倶楽部の大番頭、鈴木武史氏である。

「景観と言うと視覚的なことに目が行きがちですが、横須賀の場合は感性に訴える景観、濃密な人との交わりが特徴だと考えています」。鈴木氏は人懐っこい笑顔で話し始めた。

「この町には、どこのおばあちゃんが、どの方向に頭を向けて寝ているかも知っているほどの濃い人間関係が今も残っています。しかし昭和の中頃、昔ながらの軒を寄せ合う家々が建て替えの時期を迎えると、雨水の処理だとかトイレの位置だとか、些細なトラブルが散見されるようになりました。そんなことで江戸時代から続く人間関係を壊すわけにもいかず、お互いに配慮するようになります。すると自然にまちなみに合う家が増えたのです。今の景観は、良好な人間関係を守ろうとした結果でもあります」。

遠州横須賀街道の日常風景

外から発見された魅力と価値

独特の祢里（ねり）を曳き回すなど文化的な価値も大きい三熊野神社春大祭についても、「文化を守るためにやってきたわけじゃない。大好きな祭りを、仲間たちと本物志向で楽しんでいたら文化になっていた」と笑う。

桜の咲く季節に行われる「三熊野神社大祭」

同倶楽部では、毎年10月に「遠州横須賀街道ちっちゃな文化展」も開催している。期間中は街道にずらりと芸術品が並び、作家とおよそ3万人もの観光客たちの熱気で包まれる。鈴木氏はこれらの活動の効果について、「祭りも文化展もそうですが、訪れた方々がこのまちなみの魅力や価値を発見して私たちに教えてくれます。それによって住民は、自分たちの町に誇りを持てるようになりました」と語る。

遠州横須賀倶楽部
鈴木武史氏

深く愛してくれるファンを育てる

文化展の基本コンセプトは「50人の1回より、1人の50回」。この町は、住む人だけでなく訪れる人にも濃密なコミュニケーションを求める。「固有名詞で呼び合える、わかり合える関係が理想です。みんなではなく、少人数でもこの町や人が好きな方が来てくれればそれで満足です」と鈴木氏。「町興しなんて考えていません。この町はいずれ廃れます。その速度をゆるやかにできたらと思っているんです」とも。

多くの固有名詞のファンを獲得した今も、ゴミ収集ネットを従来の青色からまちなみに馴染む茶色に変えるなど、鈴木氏たちの取組は続く。この町は廃れるどころか、さらに輝きを増している。

第8回静岡県都市景観賞 優秀賞（SBS静岡放送賞）

源兵衛川とその川沿い（三島市）

The 30th Anniversary

平成17年には「宮さんの川とほたるの里」が第18回静岡県都市景観賞 優秀賞を受賞

三島駅から徒歩5分。
富士山からの湧水を水源とし、楽寿園内小浜池から中郷温水池まで全長1.5kmにわたる源兵衛川。この源兵衛川を中心に周辺の再生が行われ、今も美しい水辺の風景を守り続けている。

環境悪化が進行した1980年代の源兵衛川（NPO法人グラウンドワーク三島提供）

嘆く事を止めて立ち上がった市民たち

世界四大文明を例に出すまでもなく、古来より人は川とそこに流れる水の恩恵を受けてきた。富士山の豊かな湧水に恵まれた三島市も同様である。しかし、市の中心地を流れる源兵衛川は昭和30年代中頃からの高度経済成長期に、地下水の汲み上げによる水量の減少や、生活雑排水の流入によって汚れた川になってしまった。

ふるさとの原風景・原体験を取り戻そうとする市民たちの活動が発展して、平成2年農林水産省の「農業水利施設高度利用事業」に採択される。そして地域住民や専門家、行政、企業などの協働により、ほたるも自生するほどきれいな水辺自然空間として再生を果たした。その活動の中心にいるのがNPO法人グラウンドワーク三島であり、専務理事の渡辺豊博氏である。

ほたるの里開所式（ゲンジボタルの幼虫放流）（NPO法人グラウンドワーク三島提供）

知恵と行動で課題を宝物に変えていく

渡辺氏は「当時、三島が誇る資源であるはずの川がゴミ捨て場のようになっていました。再生は到底不可能に思えましたが、多くの人々に関わってもらい、その力を束ねることで、汚れた川を町の宝物に変えることができたのです」と笑顔で語ってくれた。

子供たちを対象にした源兵衛川環境出前講座（NPO法人グラウンドワーク三島提供）

三島市観光協会専務理事の宮崎眞行氏は「源兵衛川の再生がこれだけの高いクオリティで実現できた。市の職員として、他の場所もできるという自信をもらいましたね。それからは、渡辺さんたちと役割分担をして、水辺の再生事業に取り組みました」と、当時を振り返る。

グラウンドワーク三島は、源兵衛川を皮切りに市内60か所以上の実践的な活動で成果を上げ、静岡県景観賞でも多数の受賞歴を誇る。「宮さんの川とほたるの里」もそのひとつである。湧水が枯渇していた宮さんの川（蓮沼川）に企業の協力で水を引き、地域住民の手で環境整備を行って、ほたるの里を創り上げた。

次世代の担い手はもう育ち始めている

「工業・農業用水などに使われていた湧水が、観光資源や教育資源にもなっている。30年前は誰も想像しなかったことです」と宮崎氏。渡辺氏は「100回を超える説明会や勉強会で地域住民の中に入り込んでいくグラウンドワーク方式は時間がかかります。でもその分、他所と差別化された良いものができるし、良い人材や良い関係も育てられるのです」と自信を見せる。

よみがえった清流には、鳥や魚、虫だけでなく、子供たちの笑い声も帰ってきた。きれいな川で遊んだ記憶がある彼らは、大人になってもきっとその川を守ってくれることだろう。

三島市観光協会
宮崎眞行氏（右）
NPO法人
グラウンドワーク三島
渡辺豊博氏（左）

第8回静岡県都市景観賞 優秀賞（静岡県建築士事務所協会賞）

伝馬町けやき通り（静岡市）

The 30th Anniversary

歩くことが楽しくなる通りの誕生

そこを歩くだけで背筋がピンとする。晴れやかな気分にさせてくれる。静岡市の中心街にある伝馬町けやき通りには、そんな不思議な力がある。休日ともなれば、思い思いのお洒落に身を包んだ人々が行き交うこの通りも、ほんの20年ほど前まではどこにでもある裏通りに過ぎなかった。

にぎわいを見せる「てんま夏祭り」の一場面

けやき通り発展会の会長を務める深尾茂氏によると、「静岡市のメインストリートのひとつである御幸通りの裏道という位置づけ。JR静岡駅と新静岡駅を結ぶ抜け道にもなっていて、誰もが早足で通り過ぎる『駆け足道路』ともいわれていた」そうである。にぎわいも何もなかった場所に、多くの市民に愛される通りが生まれた。そこには一体どの様な物語あったのだろうか。

けやき通り発展会
深尾　茂氏
企業組合針谷建築事務
鳥居久保氏

裏通りを表通りに変えるために

「当時、日本中に漂っていた再開発の機運もあって、毎晩のように街の未来について話し合っていました。そんな時、丸井や松坂屋の建て替えが計画されたこともあって一気に話が進みます。緑豊かで季節の変化を感じる、歩くことを楽しめる通りを目指しました」と深尾氏が経緯を明かしてくれた。

再開発前のけやき通り周辺の様子

設計を担当したのは静岡県景観賞でも多数の受賞歴を誇る企業組合針谷建築事務所。代表の鳥居久保氏は「今よりもさらにクルマが中心だった時代に、歩行者が主役の通りを創れたのは、発展会の方々を中心とする若者たちの熱意があったからだ」と指摘する。実は元々の道路幅は6メートルしかない。地権者たちがセットバックし、民地を道路として提供することで敷地と道路の境目がなく、ポケットパークがあり、適度な囲まれ感もある心地よい景観を実現させることができたのである。深尾氏は「歩行者専用道路でもないのに、クルマの方が気を使っている。景観の力がクルマに勝っているのだと思う」と分析する。

市民に愛され続ける特別な場所

深尾氏は「時代背景や行政の協力体制も含めて、すべてのタイミングが良かったですね。もう一度やれと言われても難しい」と笑う。「今あるものを守ろうとする事例は多い。対して、けやき通りは新しい街とにぎわいを創り出し、20年たった今も人通りが絶えない。そこに価値があるのだと思います」。鳥居氏はそうまとめてくれた。

けやき通りを歩く人は誰もがイキイキとして見える。この通りを歩くこと、そこにいる自分を楽しんでいるかのように。

歩行者を大切にする雰囲気は今も変わらない。

JR静岡駅徒歩5分。
静岡鉄道新静岡駅徒歩1分。
伝馬町周辺の再開発の際に整備されたけやき通り。新静岡駅とJR静岡駅をつなぎ、繁華街の一部として買い物や食事を楽しむ人たちでにぎわっている。

第9回静岡県景観賞 最優秀賞（静岡県知事賞）

豊岡中央交流センター（磐田市）

The 30th Anniversary

新東名遠州森町スマートICより車で約20分。東名磐田ICから車で約25分。豊岡総合センターの一画にある施設は、地域の皆様の交流拠点として機能している。
住所：磐田市壱貫地76-5

広い軒下によって生まれた憩いの場

当たり前を変えれば明日が変わる

とかく無難な前例主義に陥りがちな公共建築において、変化の可能性を感じさせる新たな前例が生まれた。豊岡中央交流センターは、豊岡総合センター内に点在していた複数の施設の老朽化を受けて、会議・研修・コミュニティ・子育て支援等、多機能を有する複合施設として建設された。

直線の連続の中にも優しさを宿すデザイン性に富んだ外観からは想像しがたいが、プロポーザルやコンペではなく競争入札から始まった案件である。設計を担当した渡辺隆建築設計事務所の渡辺隆氏は「入札案件のクオリティを上げることで公共建築が変われば、街の景観も変わるはず」と語る。当施設の誕生の陰には、こうした志を共有する三人の男の情熱と、行政・建築士・地域住民が一体となった取組があった。

住民も巻き込んだチームプレー

「地域住民に利用され、愛されて初めて完成だと考えていました」。そう設計の意図を語る。技術責任者の磐田市都市計画課の杉浦輝氏は、理想を実現するために行政と現場の仲介役となり両氏と共に奔走した。地域住民や団体を対象とした説明会は十回を超え、工事着手後も利用イメージを持ってもらうために団体代表を集めたワークショップを実施。完成模型を囲みながら期待感を共有したという。また、建設中の住民向け現場見学会も企画し、完成後には見られない建物構造や現場作業の様子などを公開。そうした取組の甲斐もあり、落成式は地元住民がマーチングバンドや軽トラ市などで盛り上げてくれた。

三人が当初思い描いた通り、施設とその周辺には今も多くの住民たちの笑顔がある。

渡辺隆建築設計事務所が製作した模型。敢えて正面をつくらず、通り抜けができるつくりになっている。

当時を振り返るのは、発注責任者である磐田市地域づくり応援課の伊藤豪紀氏。渡辺氏も「人が集いつながることを意識しました」と当時を振り返る。

磐田市地域づくり応援課
伊藤豪紀氏（右）
磐田市都市計画課
杉浦　輝氏（左）
渡辺隆建築設計事務所
渡辺　隆氏（中央）

景観賞が景観を変えるかもしれない

杉浦氏は「受賞によって、施設が住民にとっても関わった職人たちにとっても誇れるものになった。個人的にはこのチャレンジが評価されたことで、仕事が進めやすくなりましたね」と笑顔を見せる。「入札案件でも工夫と意気込み次第で、人とのつながりを含めて良いものができることを示せたと思う」と渡辺氏。伊藤氏は「景観賞では、人と人とのつながりが評価されたことが何よりもうれしかった」と語る。

この前例をきっかけに、また新たな美しい景観が生まれることだろう。

隣接する公園から見た豊岡中央交流センター

第7回静岡県都市景観賞 最優秀賞（静岡県知事賞）

ペリーロード（下田市）

The 30th Anniversary

収益構造までも変えた修景計画

1854年、下田港に降りたマシュー・ペリー提督一行が歩いた了仙寺までの道。かつて花街としてにぎわったこの界隈は、遊歩道をメインに再整備されたことをきっかけにペリーロードと名付けられ、多くの観光客を魅了する人気スポットとなった。

「下田市は海水浴というイメージが強いかも知れませんが、ペリーロードができたことで1年を通して観光客の皆さまをお呼びできるようになりました。ここが現在の町づくりの中心であり、スタート地点でもあります」。下田市建設課の西川氏が市政における位置づけを教えてくれた。

しかしながら、ペリーロードの修景計画は元々行政が主導したのではなく、地元の有志が主体となって始めた事業だった。地域に根を下ろす人々が、真剣に考え行動を起こし、行政までも動かしてしまった。そこに本件の面白さと新しさがある。

下田市建設課
西川　力氏（右）
(有)安藤泰建築事務所
安藤　泰氏（左）

景観の真ん中に暮らしがある

「町に昔のような活気を取り戻したいという想いから、平滑川をよくする会という研究会を結成し、民間主導型の都市計画を行政に対して積極的に働き掛けました。その甲斐あって県と下田市の補助を得てこの事業が実現したのです」。そう語るのは、この修景をデザインした建築家で泰平寺住職でもある安藤泰氏。石畳の目地の深さから、腰かけられる橋の欄干の高さに至るまで細部にもこだわり抜いているが、景観形成の本質は、実はそこにはないと言う。「舞台の書割りのような画一的な統一感や上辺だけの美しさはいりません。この通りは周囲の建物の時代もバラバラだし、軒も揃っていない。でもそこがいい。市井の人たちそれぞれの生活が、ここにしかない景観を創り、それが魅力になるのですから。事実、様々な世代の方々が、明治・大正・昭和の建築が混在しながらも時間と空間を共有するこの場所に不思議な魅力を感じて、繰り返し訪れていますよ」。

平滑川沿いの小径がとても心地よい。

年を重ね馴染んでこそ価値がある

景観賞について安藤氏は「新しい場所がきれいだったり、人が集まったりするのは当たり前。20年、30年たった時にどうか。重要なのはそこだと思います」と、新たな視点を示してくれた。西川氏も呼応する。「安藤さんとお話していて、やはり永続性が大切だと思いました。そうした意味でもペリーロードは優れていますね。この財産をどう活かし残していくか。行政の責任は大きいと考えます」。

民と官が協力しながら取り戻したにぎわいは、20年を経た今も地域の人々に誇りと愛着を与え続けている。

通りには石造りの蔵やなまこ壁を利用したお店が並び、散策する楽しみがある。

伊豆急下田駅から徒歩約15分。ペリー艦隊が下田に上陸した際に行進した約700メートルの道。日米下田条約の交渉と締結の場となった了仙寺へと続き、下田登録まち遺産の指定を受けた旧澤村邸などがある。

この先も、人と景観の歴史は続く。

はじめに

高度経済成長期から経済の安定成長期への移行に伴い、都市づくりに対する人々の意識は、「潤い」という言葉に代表されるように精神的な豊かさやゆとりを求める方向へと変化してきました。このような時代背景を受け、美しいしずおか景観推進協議会は、昭和63年に静岡県都市景観賞を創設しました。

そして、この30年間で、累計応募地区数３８４７、受賞地区数２１４にも上る、美しい静岡を見つめ続けてきました。

昭和63年～平成９年

３、４頁の写真と合わせてご覧ください。

顕彰の目的は、多くの方に都市景観への理解と関心を深めていただき、ふるさとを再発見し、質の高い都市づくりに繋げていくことでした。そして、第１回の最優秀賞は、市街地において景観に配慮して整備された「サンクンガーデン」（浜松市）が受賞しました。その後は、「静岡市庁舎本館」（静岡市、Ｈ１）、「市立城内中学校」（静岡市、Ｈ２）、「玉露の里」（藤枝市、Ｈ３）など、地域の文化や周囲の自然環境と調和した公共建築物が最優秀賞を受賞しました。このように、賞創設当初は、受賞対象の多くは、建築物や橋などの構造物などでしたが、徐々に変化が現れました。「富士市文化会館「ロゼシアター」とその周辺」（富士市、Ｈ５）、「ペリーロード」（下田市、Ｈ７）「伝馬町けやき通り」（静岡市、Ｈ７）など、借景として周辺の景色を利用した地区、建築物と周辺の景色が一体となった地区など、広がりを見せました。また、「竹林の小径と修善寺回廊」（伊豆市、Ｈ９）は、特に目立った建築物などのない散策路でしたが、周辺の自然と調和し、潤いのある景観が高く評価されて最優秀賞を受賞したことは、この時期の考え方を象徴しています。

受賞記念プレート プレートデザイン／柳澤紀子

景観賞と建築賞は同じ？

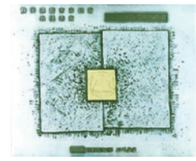
景観賞は建築賞ではありません。景観賞審査委員のお言葉をお借りすれば、「建築単体としていかに優れていても、周囲の要素との関係や総合的な環境づくりといった点で配慮に欠ければ、それは景観賞に値するものとは考えられない。」のです。景観賞とは、地域の自然、文化、歴史と一体的・総合的に形成された景観を顕彰し、それを作った人々を称える賞なのです。

静岡県の景観まちづくりの歩み

西暦（和暦）	景観関連施策・社会経済情勢	静岡県景観賞
１９８４年（昭和59年）	アメニティタウン計画事業開始	
１９８５年（昭和60年）	筑波科学万博	
１９８６年（昭和61年）	都市景観懇談会提言「良好な景観形成を目指して」 バブル経済の生成	
１９８７年（昭和62年）	**静岡県都市景観懇談会提言「静岡県の都市景観に関する提言」** 四全総～多軸分散型国土の形成～	
１９８８年（昭和63年）	**静岡県景観形成ガイドプラン** 全国景観行政推進自治体会議（後の全国景観会議）設立	静岡県美しいまちづくり推進協議会（現 美しいしずおか景観推進協議会）設立 第１回静岡県都市景観賞［最優秀賞 サンクンガーデン（浜松市）］ 静岡県まちなみ50選
１９８９年（平成元年）		
１９９０年（平成２年）	国際花と緑の博覧会	
１９９１年（平成３年）	バブル経済の崩壊	
１９９２年（平成４年）		日本の都市景観と富士山シンポジウム［（社）日本建築美術工芸協会共催］を開催
１９９３年（平成５年）		静岡県都市景観賞５周年記念誌「静岡県都市景観賞の歩み」発行
１９９４年（平成６年）		
１９９５年（平成７年）	阪神・淡路大震災	
１９９６年（平成８年）		
１９９７年（平成９年）		
１９９８年（平成10年）	特定非営利活動促進法 五全総～多軸型国土構造の形成～	静岡県都市景観賞10周年記念誌発行 ふるさとしずおか、美しいまちなみ、街のいろどり、まちづくり活動の４部門を設定
１９９９年（平成11年）	地方分権一括法	
	第１回～第４回	第５回～第12回
	静岡県都市景観賞	

平成10年～平成19年

これまでは、大きな都市の大きな公共事業の受賞が多かったのですが、小さなあるいは住民主体の取組の受賞が徐々に増えてきました。平成11年には、地域住民等が中心となって行う景観形成活動を対象とする「まちづくり活動」部門が創設され、年を重ねる毎に、まちづくり組織やNPO法人の活動、住民と行政による協働などが評価された受賞が目立ってきました。「三島 街の水の仕掛け」(三島市、H17)、「宮さんの川とほたるの里」(同)などはその一例です。また、平成13年開催の東海道四百年祭を受け、「川越街道とその周辺」(島田市、H10)、「旧新居宿の紀伊国屋と街並み修景」(湖西市、H15)など、東海道の歴史・文化を保全・活用する取組が評価された時期でもありました。



受賞記念プレート プレートデザイン／杉村 孝

平成20年～平成29年

平成16年の景観法制定や、その後の農村景観づくりなどの盛り上がりを受け、賞創設20周年を機に、平成20年からは、賞の名称を「静岡県景観賞」に改め、応募対象も都市部だけでなく、農山漁村や自然などに広げました。そして、「わさびとお茶の里「有東木」」(静岡市、H20)が、農村景観初の最優秀賞を受賞しました。この他にも「上倉沢の棚田」(菊川市、H20)、「静岡の原風景「富士山麓の茶園」」(富士市、H21)、「大井川沿いの茶畑とSL」(川根本町、H22)など、静岡を代表する農村の景観が受賞しました。

また、これまでは、行政単独または民間と行政の共同受賞が多かったのですが、住民や企業の景観に対する意識が高まっていったことから、「遠州横須賀のまちづくり」(H25)、「大社の杜 みしま」(三島市、H26)、「坂口谷川環境美化活動」(牧之原市、H27)などのように、受賞者の多くが地域住民や地域企業となり、地域の景観は地域で創るという景観形成の本来の姿が顕著に現れてきました。

受賞記念プレート プレートデザイン／川口宗敏

おわりに

この景観賞の30年間は、時時の時代意識を映しつつも、地域を愛し、地域を誇りに思う人々の営みの積み重ねと言えます。

これから我が国は、人口減少が進み、IOTが進み、未知なる暮らしの形が待つ時代に入っていきます。その中で、この景観賞がどんな意義を持ち、どんなメッセージを発していけるか、これからも真剣に模索していきます。

西暦(和暦)	景観関連施策・社会経済情勢	静岡県景観賞
2000年(平成12年)	静岡文化芸術大学開学	
2001年(平成13年)	東海道四百年祭	
2002年(平成14年)		
2003年(平成15年)	**美しい国づくり政策大綱** 観光立国行動計画	
2004年(平成16年)	浜名湖花博 **景観法**	
2005年(平成17年)	愛知万博	
2006年(平成18年)	**新静岡県景観形成ガイドプラン** 観光立国推進基本法	
2007年(平成19年)		静岡県都市景観賞20周年記念誌発行
2008年(平成20年)	歴史まちづくり法	団体名を「美しいしずおか景観推進協議会」に、賞の名称を「静岡県景観賞」に改める。顕彰の対象を、都市だけでなく田園や農山漁村などに拡大
2009年(平成21年)	富士山静岡空港開港	
	第1回	第2回
	第3回	第4回
	第5回	民間施設、公共施設、まちなみ、田園・農山漁村、景観づくり活動部門の5部門に再編
	第6回	静岡の茶草場世界農業遺産認定 富士山世界遺産登録
	第7回	
	第8回	韮山反射炉世界遺産登録
	第9回	**美しい静岡景観づくり宣言** 駿河湾が世界で最も美しい湾クラブ加盟
	第10回	**ふじのくに景観形成計画** 静岡県景観賞30周年記念「景観フェスしずおか」開催 静岡県景観賞30周年記念誌「未来へおくる物語」発行
2018年(平成30年)		
2019年(平成31年)	ラグビーワールドカップ	
2020年(平成32年)	東京オリンピック・パラリンピック	

静岡県都市景観賞　静岡県 景観賞

本誌に掲載している写真は、景観賞受賞地区紹介パンフレットからの転載であり現時点と異なる場合があります。(5～10頁は除く)